

大阪市・幕末に、龍馬が駆け抜けた街

～かつての要衝、面影は今も～

日本不動産研究所 近畿支社

不動産鑑定士 石田 武

犬猿の仲にも拘わらず薩長同盟を成立させ、大政奉還を献策した幕末の志士・坂本龍馬。龍馬は、大阪を何度も経由し、江戸・京都・神戸・福井・長崎・高知等へ飛び回り、維新の立役者となりました。龍馬が駆け抜けた大阪を、現代と比較して振り返りましょう。

【八軒家浜】

天満橋地区は、大川に架かる天満橋南側の地域。OMMビル・京阪シティーモール・大阪市営バス天満橋バスターミナル等が建ち並びます。



「八軒家浜地区：天神橋越しの大川と現在の天満橋界限」

江戸時代は、八軒の船宿などが軒を並べ、伏見から淀川を下ってきた三十石船が到着し、京都と大阪を結ぶ淀川舟運の要衝として栄えました。熊野街道の起点でもあり、参拝者も多く利用しました。

龍馬は、お登勢が女将でお龍が働く伏見の船宿である寺田屋と、この大阪八軒家浜の間の淀川を、何度も三十石船で行き来しました。早朝未だ暗いうち、河州枚方に着くと、名物のくらわんか舟が群がってきて、龍馬でさえ初め喧嘩を売りに来たのか、と思った時もありました。くらわんか舟は、天下御免の悪態の俗説もありました。

現在は、土佐堀通り沿いの昆布処永田屋本店前に八軒家船着場跡の石碑が建っています。江戸時代は、ここまでが大川だったのでしょうか？



「八軒家浜地区：永田屋前に建つ船着場跡石碑」

【天保山】

安治川河口のベイエリアの地域。天保山公園内の標高約4.5Mで、公認日本一低い山。周辺は、大観覧車・マーケットプレイス・海遊館等のレジャー施設が建ち、船客ターミナルも設置され、多くの超豪華大型客船が寄港します。対岸は、ユニバーサル・スタジオ・ジャパンが賑わっています。



「天保山地区：現在の天保山」

江戸時代は、安治川河口の湾岸の新田開発が大いに進み、安治川の船の往来と共に周辺の町々は繁栄しました。天保山は、天保2年（1831年）に安治川の浚渫が行われ、その時の土砂で出来ました。高さは、10間（20M）あったようです。幕末になると、諸外国に対して大阪の玄関口として、安治川河口が脚光を浴びました。河口から、現在の堺筋中心部までは、安治川海港路線約2里が東西に至り、海陸荷物の積み卸し、交通が極めて頻繁でした。



「天保山地区：歌川貞升画『浪花天保山風景』」

龍馬は、19歳で剣術修行のため江戸に向う途中、初めて天保山沖に着きました。土佐藩家老福岡家のお田鶴も偶然に同船し、龍馬の無骨さに華を添えます。その後、幕府又は薩摩の汽船に乗り、何度も天保山沖を起点に江戸又は薩摩等へ奔走し、大政奉還を図りました。龍馬は、薩長連合を成立させた後、伏見寺田屋の変で襲撃を受け痛手を負いました。お龍を伴って薩摩汽船三邦丸で霧島に怪我治療に向ったのも、天保山沖からです。

天保山は、その頃と比べて約5分の1の高さになりましたが、現在でも大阪の海の玄関口です。

龍馬は、「日本を今一度せんたくいたし申候」という手紙を書きましたが、“八割仕上げ”で倒れました。大阪の街も、龍馬の時代と比べると大きく変わりました。